

三条北ロータリークラブ 特別講演会

掛布 雅之講演会

演題 我が野球人生（二軍監督としてのチームづくり 人づくり）

生い立ちから阪神選手時代

実母の郷里である三条市で出生後、1歳で実父郷里の千葉市に移り、実父は、千葉商業学校の教員で硬式野球の監督しており、野球を始めた。この時に、父親から、利き手だった右手を左手に矯正され、右投げ左打ちとなった。

右投げ左うちには、松井秀樹 筒香嘉智がいるが、数は少ない。その後、習志野高校で、千葉大会で優勝。卒業後、阪神タイガースに入団。年俸は、84万円 生活は苦しかったとのこと。

昭和54年には、48本塁打 チーム新記録 ホームラン王となり、結婚。その後、左膝をけがをし、成績が散々だったことをきっかけに、阪神ファンから手を介したように、罵声を浴び、クルマはボコボコ、郵便封筒には、カッターの刃 無言電話 妻には大変迷惑をかけた。

成績を上げれば、阪神ファンは、また手を介したようになることを知っていたので、増田将棋棋士 田淵幸一選手の言葉を思い出し、一念発起して、昭和57年 59年に本塁打王 田淵に代わる新たな「ミスタータイガース」として人気を博した。60年 巨人軍 槇原から バース、掛布、岡田の三連発でリーグ優勝・日本一に貢献した。61年に 中日 斉藤から手首に死球を受けて骨折し、連続出場663試合で途切れた。その後、右肩を負傷。62年に飲酒運転で逮捕され、63年も故障続きで、現役を引退した。通産349本塁打は阪神の球団最多記録である。

野球解説者時代 二軍監督時代

平成元年から平成27年まで、報知新聞の野球評論家。日本テレビ、読売テレビの野球解説者。平成26年に阪神・二軍監督として正式に契約。原口・高山・大山らを育て、高山は、セリーグ新人王を獲得している。

増田将棋棋士の言葉

野球選手は、3割バッターとしても、7割の失敗をしていることになる。失敗しないため、常日頃から、練習は特別なことでなく、あたりまえのことで、日常でなくてはならない準備である。毎日顔を洗い、歯を磨くことと同じ。

掛布自身、遠征先でも場所を探し、素振りを300回、日常的行い、準備を

しておけば、「どんな速球でも、スローモーションに見える」と言っている。小さな体でも、遠くに飛ばすために、スポンジの球で、日常的に準備をして、短距離ヒットの増産バッターから、ホームランを打てるようになった。

田淵幸一氏の言葉

野球は楽しむことだ。三振しても、胸を張ってベンチに帰れ。ファンやマスコミの納得と自分の納得が一致するとは限らない。自分をさらし出すことが大切。江夏はこう言っている。2-2になった時は、キャッチャーに敬意をはらい、サインどおりに投げる。2-3になった時は、自分の思う球を投げる。

日常的な野球をして、結果ができれば楽しいはずだ、それを忘れてはならない。

最後に、阪神をやめるとき、複数の球団からオファーがあったが、田淵選手から、縦縞のユニホームは誇りだ。という言葉もあり、当時の中村監督から、新しい阪神の歴史を作ったお前に、球場全員が涙している。この時、生涯 阪神タイガースの一員でありたいと思ったと述べた。

トークショー

阪神ファンから、→→打てなくなると、手のひらを返すようになる阪神ファンが多いのは、恥ずかしいことだと思います。
どうすればいいのでしょうか？

掛布 雅之氏 →→千葉から大阪に来たころから、そう思っていた。
関西人は、そうゆう土地柄で育ってきているので なお
らない。(会場から、大爆笑)

三條北ロータリークラブ会長 外山 裕一会長より

大変貴重な講演をいただきありがとうございました。
もう一度、訪問したいことですので、お待ちしております。



分水ロータリークラブ
久住 勲夫